

## 自閉症スペクトラム障害児の聞き手への接近行動を伴う報告言語行動の形成

○吉垣内 美穂  
(荒川区立汐入東小学校)村中 智彦  
(上越教育大学臨床・健康教育学系)

Key Words: 自閉症、報告言語行動、タクト、接近行動

【目的】報告言語行動（タクト）は、自分の接している対象の記述や報告の機能を持つ言語行動である（井上, 2019）。自閉症スペクトラム障害（ASD）児ではタクト形成につまづきが見られ（Mundy et al., 1986）、聞き手への接近行動を伴うタクトの形成に困難が見られる（本田・村中, 2010）。本研究では ASD 児 3 名を対象に、事物の名称の報告と、自分が遂行した結果の報告の 2 場面において、聞き手との距離の違い（近距離、遠距離、別室）が参加児の接近行動とタクトの生起に及ぼす影響を検討した。

【参加児】参加児（participant、以下 P）は 3 名で、通級指導教室を利用する小学校 3 年（8 歳 9 ヶ月）の ASD 男児（P1）、小学校特別支援学級 2 年（7 歳 2 ヶ月）の ASD 男児（P2）、特別支援学校小学部 3 年（8 歳 8 ヶ月）の ASD 傾向のある知的障害男児（P3）であった。P1 はキャラクターを指さして指導者に名称を発語したが、指導者の質問に「ちょっと待って」と報告しないことがあった。P2 は興味のあるキャラクターの特徴を指導者に話す、質問には別の話で返すことがあった。P3 ではエコラリアが見られ、一語文で要求できたが、タクトは見られなかった。PARS-TR 親面接式自閉スペクトラム症評定尺度の結果、3 名とも ASD が強く示唆された。【倫理的配慮】保護者に研究目的、観察記録の方法、個人情報の守秘義務の遵守等、書面をもとに協力を依頼し、同意を得た。所属大学の研究倫理審査委員会から承認を得た。【指導場面、課題内容、指導体制】大学研究センターで、X 年 4～11 月の 8 ヶ月、週 1 回、20 分程度の個別指導を 27 回実施した。1 回の個別指導を 1 セッションとし、事物課題（宝探し）、結果課題（缶倒し）を実施した。事物課題では宝探しボックスの中から見つけた宝物（事物）の名称を報告する、結果課題では自身が倒した缶の個数を報告する機会を設定した。P1 と P2 の指導では三語文等の高次なタクトを指導した。指導者 1 名（第一著者）と補助者 1 名（第二著者）で指導した。【実験デザインと手続き、条件】実験に先立ち、両課題で事前指導 2 回を実施した。内容は使用教材への言語理解の査定と課題手続きの形成であった。事前指導の後、聞き手への接近行動とタクトの生起・非生起を査定するベースライン（BL）期、介入期、プロンプト期（P、BL と同じ）を実施した。BL の 1 回目の指導をセッション 1 として、聞き手が参加児の側にいる「近距離」、聞き手が参加児から離れて同室にいる「遠距離」、聞き手が参加児と離れて隣室にいる「別室」の 3 条件を実施し、タクト獲得状況を査定した。事物課題では宝物ボックスを近距離で机の上、遠距離で同室の隅、別室で隣室の棚の上に置いた。結果課題も同様であった。介入手続きは P1～P3 のタクト形成状況に即して異なった。P1 の事物課題・名称では、「何があった？」の質問の付加、三語文ではプロンプトカードを提示した。【標的行動と評価】タクトは事物課題の名称で「りんご、ありました」、事物課題の三語文で「誰が、何を、どうした」（例えば、男の子がボールを投げています）を標的とした。接近行動では、本田・村中（2010）を参考に、タクトを行う際に指導者の近くまで移動することを標的行動とした。事物課題ではタクトと接近行動の正反応率（%）、結果課題ではタクトと接近行動の正反応数（回）をビデオ録画をもとに評価した。

【結果及び考察】事物課題では、P1・遠距離条件でのタクトの正反応率がセッション 4 まで 100%であったが、セッション 7 で 0%となった（Fig.1）。介入で質問「何があった？」を付加し、100%となった。続く三語文の介入では、プロンプトカードの提示が有効であった。近距離、別室条件でも同じ傾向が認められた。接近行動の正反応率は、近距離、遠距離、別室条件の BL～P を通じて 100%であった。P2 では P1 と同じ傾向が認められた。P3 は P1 や P2 と異なり、質問「何があった？」でタクトは高まらず、補助者の言語プロンプトによる介入が必要であった。結果課題では、P1 と P2 の近距離、遠距離、別室条件でタクトと接近行動が毎回生起した。P3・遠距離条件でのタクトと接近行動は、セッション 14 までも生起しなかった（Fig.2）。介入で補助者の身体プロンプトと言語プロンプトを行うと、タクトと接近行動が毎回生起したが、P では維持しなかった。

聞き手との距離の違い（近距離、遠距離、別室条件）によるタクトと接近行動の生起状況での明確な差は、P1～P3 とも認められなかった。一方で、P1、P2 の 2 名と P3 の参加児間では生起状況に違いが認められた。事物、結果課題の結果より、P1 と P2 では、接近行動を伴うタクトを指導開始時から形成していたが、P3 は未形成であったためと考えられる。P3 の事物課題 BL で接近行動を伴うタクトが生起した要因として、聞き手に接近する手続きが課題に含まれていたことが考えられる。聞き手に接近するための手続きを課題に組み込んだ上で、言語モデルや身体プロンプトの提示が有効と考えられる。

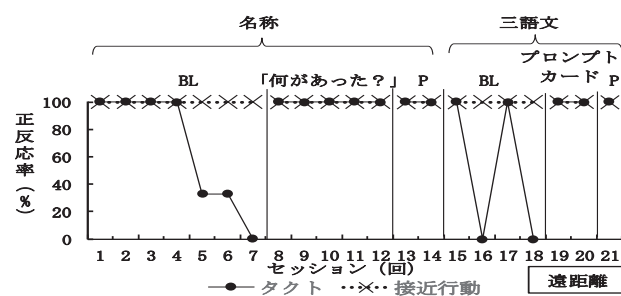


Fig.1 P1・事物課題・遠距離条件のタクトと接近行動の正反応率

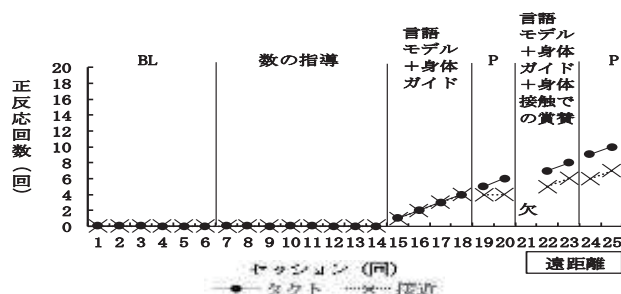


Fig.2 P3・結果課題・遠距離条件のタクトと接近行動の正反応率（累積）

【文献】本田智寛・村中智彦（2010）行動分析学研究, 25, 42-64.  
井上雅彦（2019）言語行動—タクト—. 一般社団法人日本行動分析学会（編），行動分析学事典. 丸善出版.  
Mundy et al. (1986) *Journal of Child Psychiatry*, 27, 657-669.  
(YOSHIGAITO Miho, MURANAKA Tomohiko)